

戦後 50 年以降、「子どもの戦争の記憶」は なぜ論争になり、いかに語られたのか

小酒 奈穂子

本稿の目的は、戦後 50 年以降、「子どもの戦争の記憶」はなぜ論争になり、いかに語られたのかを検討する。

「子どもの戦争の記憶」とは終戦時直後、幼少期から少年少女時代だった 1930 年代生まれ世代の戦争の記憶である。ベストセラーになった『少年 H』の著者妹尾河童は、1930 年生まれである。この『少年 H』を、大量の歴史的齟齬や史実の誤認があるとして、批判した少国民研究の第一人者で児童文学作家である山中恒は、1931 年生まれである。2013 年に『少年 H』を映画化した監督の降旗康男は、1934 年生れである。

本稿の問いは3つある。1つ目は「子どもの戦争の記憶」がなぜ論争の対象となったのかである。「子どもの戦争」自体は、戦後文学や映画で扱われてきたが、「子どもの戦争の記憶」が論争を引き起こすに至ったのは、戦後 50 年以降『少年 H』が初めてである。

2 つ目は戦後 50 年以降、「子どもの戦争の記憶」はいかに語られたのかである。

3 つ目は「子どもの戦争の記憶」をめぐる語りは、大震災(1995 年阪神淡路大震災・2011 年東日本大震災)と関連があったのかという点である。2 年後の 1997 年に『少年 H』は刊行され、2013 年に映画化されている。

この 3 つの問いを明らかにすることによって、戦後 50 年以降「子どもの戦争の記憶」は日本人の戦争観にどんな影響があったのかを検討してきた。この 1930 年代生まれ世代は、戦争で傷をうけていても、社会的言語を持たず、内心の自由が奪われていた。戦争体験の苛酷さを語るという土俵に乗れば、自分たちが年長者より劣った地位に立たざる負えないジレンマを抱えていた¹。戦後 50 年を過ぎ、年長者がいなくなりはじめ戦争体験を語る表舞台にたった。

戦争体験を語る表舞台にたったということは、戦争の記憶の継承という役割をも担っていた。妹尾は執筆した動機として推薦者の存在を強調し、『少年 H』の大量の史実誤認や歴史的齟齬を批判し

¹ 小熊英二『民主と愛国』新曜社、2002 年、356 頁、393 頁、662 頁。

た山中恒も、戦争の記憶の継承という役割と責任を強調していた。このことは「子どもの戦争の記憶」が、なぜ論争の対象となったのかという前提にあたる。

『少年 H』の受容に対しては、歴史認識の誤認への危機感があった山中がとった批判の手法は、年譜的な資料を並べて、事実の間違いを指摘するという方法であった。その山中の憤りの激しさの根底には、少国民研究にこめられた恨みがあると分析されている。

『少年 H』がベストセラーになったことは、大衆文化レベルで「子どもの戦争の記憶」が戦争の記憶の継承として認識されていたことを意味する。『少年 H』は戦争を伝える教材にもなった。戦争に対して、戦中は半信半疑まではいかず半信状態だった人たちも、内心の自由が奪われた傷をいやし、感動し自己確認した。

山中の批判によって、論争の争点となったのは、『少年 H』は戦争の真実を伝えているのかどうかという点であった。戦争の真実については、メディアでの語りを展開され、史実の間違いがあっても、少年の目でみた戦争の語りは肯定された。肯定され指向されたのは、少年が育った家族や庶民の生活であった。さらに『少年 H』に感動したのは、「戦争は嫌だけれども、家族や友だちとか、ああいいう人たちの姿がうらやましい²」という安心できる共同体への願望があった。

朝日新聞にも、「『人と人の結びつきを大事にしたい』震災後そんな訴えが人々の心をとらえ、『絆』という言葉がたびたび使われた。一方で原発事故は多くの人の価値観を揺り動かし、安心やリスクをめぐる規準を失わせ、社会に「分断」を生んだようにさえ見える」と「絆」「つなぐ」といった言葉が多く使われたことを述べている³。

戦後 68 年にあたる 2013 年は、「子どもの戦争の記憶」はより安心を求めるコミュニティ指向を満たすものとなった。2011 年の大震災の 2 年後の 2013 年は、家族幻想と純真な少年の戦争の記憶がうけとめられるぎりぎりの時代となったといえる。

映画化された 2013 年は戦後 68 年にあたるが、戦後 50 年の『少年 H』の受容におけるコミュニティ指向は、より家族に焦点化された。「子どもの戦争の記憶」は、勇気、信念、愛情と「心情の美」を伴った「家族の物語」として、家族愛が強調された。背後にある史的状況への関心は抑制された。戦後 50 年～68 年、「子どもの戦争の記憶」は戦争がなぜ起きたのか、戦争責任はどこにあるのかといった問いや関心を遠ざけ、歴史認識の脱文脈化があった。戦後間もない空腹や飢えや大人からの暴力に苦しんだ「子どもの戦争の記憶」についての言及も遠のいた。フォーカスされたのは、当時の社会不安を背景に人間愛や家族愛に満ちたコミュニティ願望であり、父や教師に対する男性優

² 真仁田昭・妹尾河童対談「『少年 H』は自立の物語」『児童心理』金子書房、2000 年、71－73 頁。

³ 「(東日本大震災 1 年・2) 変わる社会 分断を越えて」『朝日新聞』2012 年 3 月 2 日、34 頁。

位⁴の「下からの感謝」⁵が、「子どもの戦争の記憶」の感情資源となり感動消費された。よって「子どもの戦争の記憶」は商業や教育にも利用され、反戦を掲げながらも、日本人の戦争観に歴史認識の脱文脈化をもたらした。

⁴ 菅本康之「日本はいったいどこで戦争したのか」『藤女子大学 国文雑誌』藤女子日本語・日本文学会、2008 年。

⁵ 井上義和『未来の戦死に向き合うためのノート』創元社、2019 年。